

身近な課題に取り組み生きる力を育む 地域で育むキャリア教育

市立高校の学科改編によって誕生した富士市立高校は地域課題解決型学習の先駆者として注目を集め、小誌でも数回にわたり紹介をしてきました。地域での学びによって生徒はどうか、卒業生の言葉から探ります。

高校は前に進む原点 卒業生座談会にみる 地域で学ぶ価値とは

第25回 富士市立高校
(静岡・市立)



取材・文／江森真矢子

夢をもち生涯にわたって学び続ける力を育てる「ドリカムハイスクール(D)」、物事の本質を追究し主体的に取り組み力を育てる「探究ハイスクール(I)」を掲げている。

同校の総合的な探究の時間「究タイム」は、探究の技法と姿勢を育てる〈序〉から始まり、学習を振り返り将来を見据えてスピーチをする〈夢〉で終わる、CDIすべてを具現化するキャリア教育だ。中核となるのは2年次の〈活〉、富士市の課題に向き合い、フィールドワークを経て解決策を提案する「市役所プラン」だ(左下図)。5つの単元を通して課題設定から振り返りまでの探究プロセスを回しながら身につくのは「社会で生き抜く力、自分の人生を切り拓く力」と社会人1年目の越膳慧太さんは説明する。

共通するのは 行動力とメタ認知の力

その力とは具体的にどんなもので、何によって培われたのだろうか。3人が共通項として挙げたのはまず「行動力」。主催者の1人、手嶋穂さんは「市役所プランで先生や親以外の大人と

も話せることを知り、地域づくりは高校生の私でもできるという自己効力感が芽生えたのだと思います。大学に入ってからのもっといろんな人に会いたくて日本を縦断しました」。同じく長田結衣さんは、究タイムを契機に市の人材育成講座に参加した。「一番大きい変化は目標をもてたこと。入れそうだからというだけで入学した私に行動力や人を受け入れる力がつき、地域に興味をもって大学でも飽きずに続けている。中学の時から生まれ変わったぐらい。きっかけをくれたのが高校です」

リアルな体験を通してできるんだ！と実感し、次はできるかも…と希望を抱くことが行動力の原点になるのだろう。「市役所プランでは提案だけでなく実行までしたかった、と何人もから言われましたが、申し訳ないけれど1学年3学科240人でそこまでやることには限界があった。手探りで学校づくりに取り組む中、長田さんのように学んだことを生かして実社会で自走してほしいという理想もありました」と語るのは座談会に登場した遠藤健先生。最初から究タイムを創ってき

た1人で、現在は他校に勤務している。「ただイベントで終わってほしくはありませんでした。高校時代に大事なものはプロセスから学ぶこと。まず高校生を地域に戻し、多様な人と何らかの関わりを作ることで1人の教員が学校で育てるより、爆発的な、予想外の成長が起きるのではないかとという期待もあつたんです」

プロセスから学び体験を経験に変えるのは、次の共通項として挙げた「メタ認知」の力だろう。「大学の先生に指摘されて気づいたのですが、物事を俯瞰できるのが私の強みです。振り返



左上から時計回りに越膳慧太さん(2015年スポーツ探究科卒/北海道浦幌町地域おこし協力隊)、手嶋穂さん(16年総合探究科卒/東北芸術工科大学4年)、遠藤健先生(現・静岡県立駿河総合高校教諭)、長田結衣さん(16年総合探究科卒/静岡大学4年)

School Data
1961年創立/総合探究科・ビジネス探究科・スポーツ探究科/生徒数699人(男子333人、女子366人)/進路状況(2019年度実績)大学92人・短大18人・専修72人・就職50人



北海道、山形、静岡を繋いでの座談会。開催前にはオンラインでもミーティングを重ねた。現在、登壇者を変えて2回目を開催することを検討中という。

●小誌で富士市立高校を取り上げた記事
Vol.404 (2014年12月)
2年生全員が市役所の職員として「地域の課題を発見し、実現可能な解決策を提案する」市役所プラン」
Vol.415 (2016年12月)
「探究に満ちた学校へ」目指すべき学校像を具体化し、校外を巻き込んだカリキュラムを設計

りによって、目的・行動・結果を言語化できるようにになりました」と手嶋さんは言う。

授業ごとの振り返りに加え1年次に個人で自分の好きなことや理想の姿を描く「ドリームマップ」、3年次の「自分スピーチ」も自身を客観視する機会だ。「今回のイベントもですが、僕は勢い担当を自認しています。自分の強みも弱みもわかっているから誰かと協働することができる。自分の課題を見つけて解決することができないと、もっと大きな活動もうまくいかないと感じています」と越膳さん。メタ認知の重要性を実感している故か「今は仲間もこれから社会人になり基礎を応用へ変えていく、学んだものをどう活かすか、という時。高校時代の探究が自分たちはどう生きているのか、先生を迎えて振り返りたいという思いがパツと湧いて」座談会の実行に至ったのだという。

教師が伴走者となり 他者を尊重する姿勢が育つ

究タイムを熱く語る卒業生3人が口を揃えて言うのは、最初から熱心だったわけではなく「ただ楽しくてのめり込んでいった」ということだ。楽しかったのは「絶対解がない」「自分で考える」「意見が尊重される」「考えた先に大きな気づきがあった」から。傾聴の文化が育っていき環境も大きく作用していたようだ。

長田さんは「大学で『よく頂くよね』と言われたのですが、富士市立の子はみんなそうでした。友達に『それ違う』と言われることはなく、先生方は『できるからがんばって、とりあえずやってみな』と否定しない。聞いてもらえるから人の話も聞けるようになったんだと思います」と分析する。手嶋さんは「1年の担任の後藤先生が最初に板書したのが、批判厳禁、便乗発展、質より量、自由奔放。プレストのグラドルルールだったので、今でも私が人と関わる際の根本になっています」と言う。

2人の担任だった後藤大輝先生は「心掛けていたのは生徒が楽しんで取り組めること。私自身も初めてで答えの見えない中、間違いを指摘するのはなく一緒に考えてきた」結果、生徒は自分たちで考えて動くようになった。こうした先生方の姿勢は現在も貫かれ

「教科の授業と違い、究タイムは8年間やってもどう進めていけばいいのかわからないことが多い。でも、生徒が活動を通して判断力や課題発見・解決力、表現力をつける中我々も一緒に学んでいます。これからは先導ではなく伴走しながら進めたい」(永井厚史先生)、「卒業生が高校時代をポジティブに語ってくれたのが嬉しい。今後とも生徒の学びを中心に考えていくことが大事」(斉藤雅先生)と異口同音に語る。

究タイムがスタートして10年。連携の輪は大学や企業、NPOに広がった。また、課題を意識して主体的に解決しようとする生徒が多いという実感を生方にももっている。座談会を終えた越膳さんは「学び続けるというのは、適度に振り返って前に進むこと。今も富士市立から学んでいるし、これからも学びを得られると思った」と語ったが、行動力を持ち、学び続ける姿勢は企画した3人だけに特別なわけではない。

今春の休校期間中、富士市立高校には卒業したばかりの生徒からたくさん動画が送られてきた。コロナの影響で合格体験を語る会は中止になったけれど、自分たちが今できることを、と仲間を募った卒業生がいたのだ。高校での成長を振り返り「こんな力がつくよ」「がんばって」と先輩に語りかけた内容が多かったという。

総合的な探究の時間「究タイム」の3年間

